

## 「中国（南京）研修参加報告書」

京都大学経済学部1年 赤井美苗

- ① 学習成果（今回の派遣に参加する前とした後とで、留学、大学での学習、国際理解への意欲に関して、自分にどのような変化が起きたか、今回の派遣に参加して、次の海外留学についてどのような関心・計画を持つようになったかなど）

実際の中国は研修前の中国とは異なっていた。

研修前は、空はどんよりとくもり、町全体が騒々しくごみがたくさん落ちて整備されていないところを想像していた。しかし、実際の中国は歩道のタイルがしばしば割れているが、木々が道路わきにきちんと植えられ都市計画のもと整備されていた。また、高級ブランド店の入ったビルがそびえ立ち比較的静かな地域と、普通の市民が利用する市場のような騒がしく生活感のあふれる地域とがあった。

最も驚いたことは、中国人の多さである。中国では観光客の多くが国内の中国人であり、有名な観光地に行っても英語が通じないことも多く、英語を話すことができれば困ることはないだろうと考えていた私は衝撃を受けた。前期、私は中国語の授業を聴講していた程度にしか中国語に触れていなかったので聞き取ることも話すこともできず、お土産を買うのにも先生にたよるしかなかった。この先中国に行く可能性は十分にあり、自分でコミュニケーションが取りたいと思い、そのため、時間のある大学生のうちに簡単な中国語を身につけたい。

また、中国での出来事を自分の風習を基準に考えてしまうことが多く、相手の立場や風習を理解することの難しさを実感した。相手の国や地域の文化、風習について相手に寄り添って理解することのできる、多角的な視点を持つ人になりたいと思った。そのために、様々な国や地域に行き、或いは日本で様々な背景を持った人に出会い、積極的に交流したいと思う。

- ② 海外での経験、

南京に泊まっているとき、部屋の清掃係のおばちゃんたちがよく言い争っているのを目撃した。初めは非常に怖く、あまり関わりたくないと思い、おばちゃんたちが部屋に来る前に外出しようと急いだ。しかし、それは私からするとけんか腰に見えるが、彼女らにとってはただ主張するのに大きな声を出しているにすぎないのだ、とチェックアウトの日の朝、廊下で彼女らと少し話したときに気づいた。それからは、街中で喧嘩口調のおばちゃんを見つけても起こっているわけではないのだ、と理解することができた。その国々で文化や風習は違うのだから、自分の風習で判断するのではなく相手に寄り添って相手のことを理解することが大事なのだろう。

- ③ プログラム内容

南京の街を実際に自分の足で歩き、ビル街の隣にあるまだ開発されていない地区やそこに住む人を見、また夫子廟など観光地を訪れて中国の文化などについて観光とは異なる学問的な目線でフィールドワークをした。南京大学の学生に南京を案内してもらいながら交流した。上海では、もともとの上海の姿が残る地区と現在メインストリートとなり栄えている地区とを比較した。

- ④ 進路への影響について

相手の国や地域の文化、風習について相手に寄り添って理解することのできる、多角的な視点を持つ人になりたいと思った。